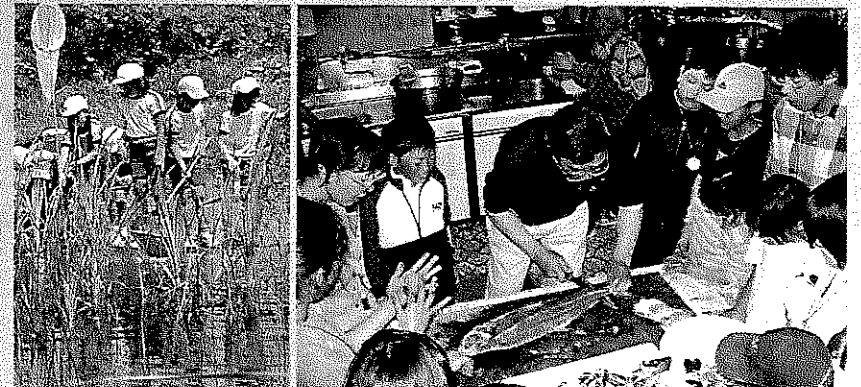




農村文化運動

持続可能な 「地域づくり」「人づくり」に向けて ——「国連・持続可能な開発のための教育 (ESD) の10年」の総合的研究 中間報告



五、ESDの視点から見た学校 教育変革の可能性

茨城県牛久市での「参加型学習」
事例を通して

小玉敏也

立教大学大学院



はじめに

二〇〇二年から、学習指導要領改訂の目玉として学校に総合的な学習の時間（以下「総合的学習」）が施行された。この時間は、各学校が地域と子どもの実態に応じてカリキュラムを編成できるという意味で、従来の中央集権的な学校教育に大きな変革をもたらす時間として各方面から期待が寄せられた。

しかし、グローバルゼーションによる日本経済の競争力低下を問題視する立場から、教育界に学力低下論争が始まり、総合的学習は実践が広がる前に低学力を助長する時間として批判の矢面に立たされた。この批

判を受けた文科省は学力向上路線に転換し、今回の学習指導要領の改訂において総合的学習の地位は確実に低下するものと推測される。

このような状況のなかで、「持続可能な開発のための教育の一〇年」は開始された。社会的公正、環境の保全、男女平等、平和な社会の実現等の共生的教育観をもつESDの実施が、現在の競争的教育観を克服する原動力になり得るのだろうか。この問題を、学校を拠点とした持続可能な地域づくりの事例から、特に「参加型学習」という方法論の観点から考察してみた。

①「参加型学習」とは何か？

参加型学習とは、開発教育や社会教育、まちづくり等の分野で活用されてきた方法で、学習者の主体性を保障しながら地域の諸課題を実践的に解決していく能力（社会参加能力）を育成する方法として定義され、学習者のエンパワメントを重視するESDの方法論としても注目を集めている（小玉・阿部二〇〇六）。

しかし、その重要性は強調されても、学校教育のな

「人と児童が出会うまちづくり」事業体制図

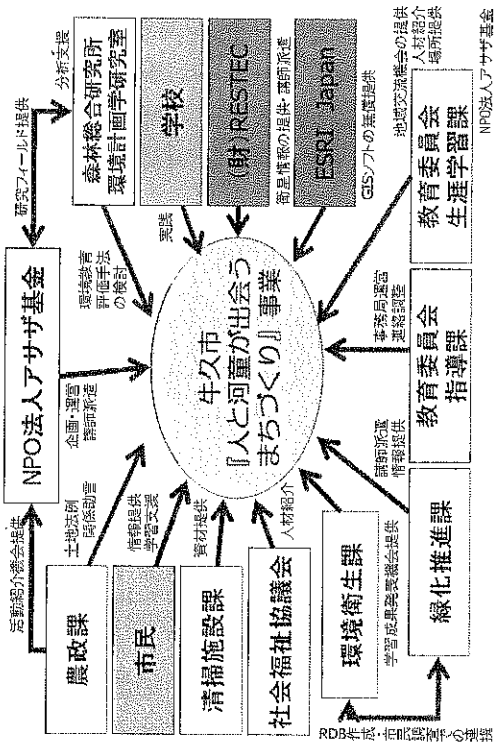


図1 「人と児童が出会うまちづくり」事業体制図

かではポピュラーな学習方法として普及しておらず、一部の熱心な教師の間で実践される段階にとどまっている。ましてや、学校を取り巻く地域ぐるみの方法論として実践されている事例は数少ない。

茨城県の牛久市で二〇〇四年から実施されている「学校じオトトプから始まるまちづくり」事業（以下「事業」）は、その数少ないESDにおける参加型学習の事例として紹介することができる。この事業は、霞ヶ浦とその流域を対象とした自然再生と循環型社会構築を目指す市民型公共事業アサザプロジェクトの一環に位置づくものであり、NPO法人アサザ基金の提案から始められた。

2 ESDとしての牛久市事業

牛久市の事業は、学校・NPO・行政が協働してコミュニティの自然再生に取り組む総合的学習の実験的プロジェクトである。これは、「市民参加の学校づくりからまちづくりへ」という主旨のもとに、各学校のじオトトプの生物観察から地域の環境を知り、人と自然が共生するまちづくりにつなげようとするものであ

る。

二〇〇五年には、図1のようなネットワーク体制が整えられ、各セクターが学校の総合的学習をバックアップしていった。この事業では、定期的開催される「まちづくり実行委員会」（以下「実行委員会」）が中核的な組織となっている。そこでは、教員、教育委員会、NPO、市役所、研究機関などの代表者が集まり、各学校の総合的学習の報告や情報の共有、問題の解決について話し合われている。

各学校では、事業の主旨を踏まえた授業の計画を立て実践するが、教員代表はその進捗状況を実行委員会で報告しあい、議論された内容を再び各学校にもち帰って次の授業に生かしていった。アサザ基金は、専門的な知見を生かして、授業の計画立案への協力、各学校のじオトトプの造成や維持管理、生物の生態と地域環境に関する出前授業などを全校で実施した。その他には、森林総合研究所による環境教育の手法や評価についての助言、牛久自然観察の森の活用支援、研究機関による環境モニタリング技術の提供が行なわれた。

なお、これらの各学校の授業は、牛久市主催の「環境フェスタ」で市民に広く発表された。そこでは、市

内全校の授業概要のポスター展示や、子ども代表による学習成果の発表と市民との意見交換が行なわれた。また、事業の進捗状況は、市広報紙やホームページ、関係機関の会報などによって市民に情報提供されている。

学校での総合的学習をめぐる、これほど組織的かつ計画的に多様なセクターが協働して取り組んでいる事例は数少ないのではないだろうか。このネットワーク体制では、学校教育関係者だけでなく、多様な立場の人びとが参加して総合的学習をつくりあげていく制度的な条件がみごとに整えられている。

では、アサザプロジェクトの観点から、なぜ牛久市の事業を展開しなければならなかったのだろうか。その第一の理由は、霞ヶ浦の水源地である谷津田の保全に市民の関心を向ける必要があったからである。牛久市は、かつて霞ヶ浦水系と牛久沼水系の谷津田が毛細血管のように張り巡らされた地域であった。しかし、谷津田は農業の近代化、減反政策、開発によって次々に埋め尽くされ荒廃していった。この対策として、霞ヶ浦の自然環境を水源地から湖までの流域単位で再生するために、谷津田が残る牛久市での環境教育が求め

られていたのである。第三には、この流域単位の保全と再生をはかる方法として、地域コミュニティ単位の取り組みとそのネットワーク化が必要だったからである。小中学校は学区という地域コミュニティの拠点であり、それを環境教育プログラムでネットワーク化することで、二つの水系の流域を覆う新しい社会システムを構築することが可能になる（アサザ基金二〇〇六）。しかも、その担い手は二十一世紀の地域コミュニティを創造していく子どもたちなのである。ここに、牛久市の事業をESDととらえる根拠がある。

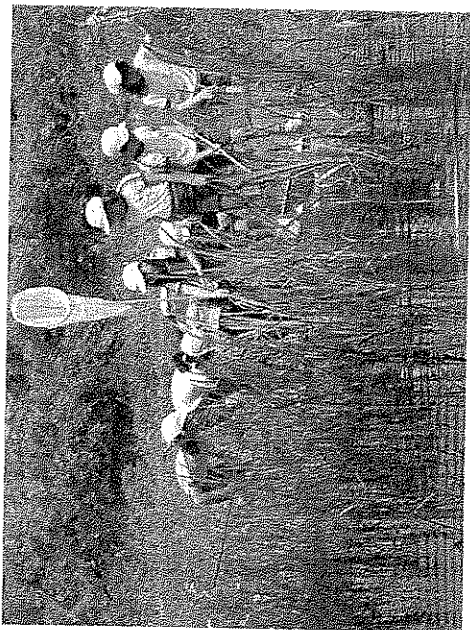
3 神谷小学校の総合的学習の実践

このようなネットワーク体制の支援によって、各学校はどのような授業をつくりだしていったのか。その一例として、牛久市立神谷小学校の二〇〇五年度の総合的学習の授業を紹介する。

神谷小は、新興住宅地のなかにある創立二四四年目の比較的新しい学校である。周辺は、住宅が立ち並ぶ一方で、雑木林が広がるゆたかな自然環境に恵まれ、校

境に改善する必要があることが教えられた。

まずは、子ども自身が、生き物が生活しやすいようにビオトープの改修作業を行ない、そのなかで水辺の生物と直接ふれあう体験をした。次は、校地内の池で見つけたヤゴを捕まえて飼育や観察をし、プールからヤゴを救出する活動を通して、よりいつそ生き物た



学校周辺の環境の調査

地には子どもが活用できるビオトープや農地があり、広い自然観察園も隣接している。

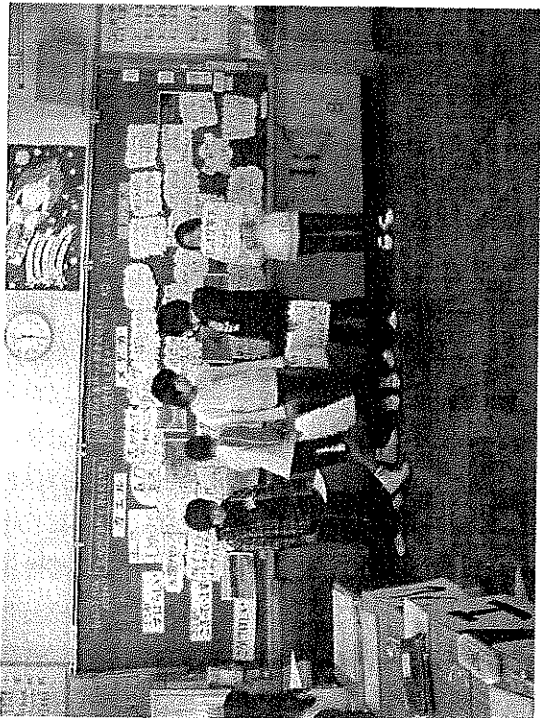
神谷小四年生の総合的学習は、「広げよう！自然を守る大切さ」というテーマのもとに「①身近な自然とふれあい、自然観察や地域を調べる活動を通して、環境や地域社会に対する考え方を深め、問題に気づくことができる。②人と自然の共生を目指し、自分たちにできる行動を考え実践することができる」という目標で一年間の授業をスタートさせた。この目標には、二つの特徴がある。一つは、子どもの学習対象を、ビオトープの自然観察から地域社会の問題の考察へと拡大していることである。もう一つは、子どもの学習活動への主体的な参加と具体的な実践行動を意図的に位置づけていることである。

前期の授業は、身近な学校ビオトープの生物観察から始まった。そこに生息するトンボ、カエル、メダカをじっくり観察し関心をぶくらませた後、アサザ基金の職員をゲストに迎えて「生き物と話をしよう」というテーマの授業が行なわれた。そこでは、それらが環境の変化に敏感な弱い生物であること、学校周辺の「生き物の道」を調べて彼らが移動し生活しやすい環

境への関心を育てていった。

夏休み明けの授業では、宿題となっていた各家庭周辺の環境調査を発表した。これは、地元出身の祖父母や地域のお年寄りに、昔の神谷小学区の環境を聞き取り調査してくるという内容である。この発表と一学期の学習を引きついで、次に「生き物の道を見に行こう！」というテーマのもとに学校周辺の環境を調査した。この調査は、人間の目ではなくトンボ・カエル・メダカの目になって周辺の環境を調べるもので、前期から後期にかけてくりかえし実施された。例えば、カエルの目で調査する子どもたちは、カエルが皮膚から水分を吸収する生き物であるために、日陰や水辺、草地や林などの湿った場所を好み、半径数キロしか移動できないという知識から、学校周辺にあるコンクリートの水路や道路などの棲息に適さない場所があることに気づき、「どうすれば可愛いカエルを守れるか」という課題をもつようになった。また、そのような場所や移動を阻害する物を発見したら、生き物を発見した場所とともに、自作の生き物マップに記入していった。

これらの地域調査を積み重ねていくことによって、子どもたちは、どうすれば学校周辺の環境を生き物に



調査した結果を報告し、提案し、自ら参加・行動する参加型学習

いを直接伝えたことがきっかけとなっている。

「荒れた谷津田は市の土地だそうです、ビオトープにするために使わせてください」

「ビオトープには、池をつくりたいです。生き物が

すみやすく改善できるかと考える一方で、生き物を守ることを最優先にすると人間の生活に不都合が出てくることにも気づき始め、人と自然との共生という大きな問題の解決に悩みはじめたのである。そこで、この問題を考える格好の教材となったのが、学校の隣にあった池である。現在ここは、雑草が繁茂する荒地であるが、実は昔の谷津田の荒れはてた姿だったのだ。地域調査のなかで、この場所が気になっていた子どもから「池をどうにかしたい」という声があがり、話し合った結果、この場所全体を大きなビオトープに変えようという考えにまとまった。これは、夏休みの地域の調査で、お年寄りから昔の谷津田の様子を聞いたことが影響しているのかもしれない。その後、「どんなどビオトープにするか」という課題を学年全体で共有し、一人一人がビオトープの完成イメージを絵に描いて、それを何とか現実化しようということになった。

これの活動によって、子どもたちは、学校のビオトープに棲む生き物たちが周辺の環境を改善しない限り快適に暮らせないことを理解し、その問題の解決方法を具体的に学び始めたのである。ここまでの神谷小の総合的学習の成果は、子ども自身が一月に行なわれた

環境フェスタで発表し、参加した市民から大きな賞賛をえた。

後期の授業では、荒れた谷津田をどのようにビオトープにするかということが課題となった。学年全員が描いたビオトープの構想図には、一人一人の思いが込められていた。なかでも、ある学級では、ビオトープの池周辺に橋やベンチを描く子が多かった。これは、「地域に住むお年寄りや体の不自由な人も訪れてほしい」という考えからである。担任によれば、この考えは、子どもが地域調査をしているときに、近くの老人ホームに関心を示したことから生み出されたということである。つまり、当初は、地域の自然を観察する目的で調査をしていた子どもたちであったが、その過程で地域の社会的環境にも目を向けていったのである。そして、彼らの内面で、カエル・トンボ・メダカという生き物と、お年寄り・障害者という人びとが、同じ《弱き存在》として結びついたのである。

このビオトープ構想図は、学校とアサザ基金、行政の連携によって、二〇〇六年度から市民公園として少しずつ整備していくことが決まった。その決定は、子どもたちが、学校を訪れた牛久市市長に自分たちの願

えを採りやすいし、流れがあれば水は汚れません。池を掘るときは、大人に協力してほしいです」

「昔、神谷小の周りには田んぼがありました。五年生になったら米づくりをして、自分たちでつくったお米でお餅が食べたいです。でも、どうやったら田んぼができるか、農家の人にも聞いてみます」

などなど、自分たちの学習をもとにして、具体的かつ説得力のある提案をおこなった。しかも、市長に一方的に依頼するのではなく、「自分たちも行動するから、大人も協力をしてほしい」という責任感のある言葉で伝えられた。つまり、これまで子どもが教室の授業のなかで考えてきたプランが、この段階で地域に発信され、多様な立場の大人とともに実行する環境改善活動に発展していったのである。いかにいえば、学校での環境教育・総合的学習が、持続可能な地域づくり・まちづくりの学習活動へとつながっていったといえよう。

4

学校教育を変えるために

学校での環境教育は、自然とのふれあいを重視する

自然体験学習や、ごみや水などの問題解決を学ぶ生活環境学習が、まだまだ一般的である。しかし、神谷小の授業は、生き物との直接体験による感性学習から、生き物と環境との関係性を学ぶ知識・技術学習を経て、地域の環境保全活動に実践的に関わっていく参加・行動学習へと、一年間かけて発展していった。この発展のプロセスそのものが参加型学習なのである。そこでは、子どもが主体となって学習活動を展開し、地域の自然と文化、社会の諸課題をさまざまな大人の手を借りながら解決していく。そして、大人が「子どもの参画」(R・ハート、二〇〇〇)の制度と条件をしっかりとつくりあげることによって、子どもの学習活動は、学校の枠をこえて霞ヶ浦の自然再生と地域コミュニティ再生のための持続可能な社会づくりにもつながっていった。

神谷小の他にも、この事業から多様な授業が生み出された。例えば、研究機関の協力を得て、衛星画像から牛久市の自然環境を調査し地域の生態系マップをつくり上げた授業や、人と自然が共生できるまちづくりの提案を行なった授業など、パートナーシップの成果が少しずつあらわれはじめている。この事業では、学

校が単独で教育内容を決めたのではない。学校とアサザ基金との共同授業、実行委員会での他校との情報交換、保護者や教育委員会との協力等、さまざまなネットワークのなかで総合的学習の内容がつくりだされていったのである。おそらく、各学校は多大な時間と労力をはらっただろう。しかし、この事業への参加が、学校の新たな教育活動を創りだしていく契機となり、さらに市民との連携を強めていくことにより地域コミュニティのなかでの新たな学校像が生み出されていくのではないだろうか。この協働実践こそがまさにESDであり、混迷を深める日本の学校教育に重要な問題を提起する。

【参考文献】

- ・小玉敏也・阿部浩(二〇〇六年)「持続可能な開発のための教育に向けた『参加型学習』概念の検討」『環境教育』五(二)
- ・アサザ基金(二〇〇六年)「湖と人を結ぶアサザプロジェクト」『十一周年記念の集いシンポジウム報告書』
- ・ロジャー・ハート(二〇〇〇年)「子どもの参画」、鼎大社。